

弥生時代を再考する⑨ エポックメイキングな発掘調査、池上曾根遺跡

ちょうど50年前の昭和45年(1970年)、「人類の進歩と調和」をテーマに掲げて開催された大阪万博(EXPO'70)は、昭和39年(1964年)の東京五輪と並んで、日本の戦後復興と高度経済成長を象徴する、まさにエポックメイキングな出来事だった。千里丘陵の万博会場は、183日間の会期を通して、延べ6,400万人を超える入場者を集めたが、当時、小学校2年生だった筆者も、今は亡き祖父母、父母らとともに会場を訪れ、熱気の溢れる雰囲気、圧倒されたことが懐かしく思い出される。万博の誘致、開催に向けては、アジア初の五輪が開催された東京に負けまいと、大阪近辺で、市街地の改造や道路、鉄道などのインフラ整備が一気に進められた。

昭和39年(1964年)、大阪と和歌山を結ぶ幹線道路(第二阪和国道)の建設計画が正式に発表され、和泉市の池上曾根遺跡(当時は池上遺跡と呼称)の上を路線が通過することが明らかになった。池上曾根遺跡は、地元の教師や生徒の活動により、その頃までには、弥生時代の大規模遺跡であることが知られるようになっていて、南繁則氏を中心とした地元有志が「池上弥生式遺跡を守る会」を結成し、保存を求める活動が広がった。しかし建設省は万博までの開通方針を崩さず、新国道の遺跡通過が避けられない事態となり、当時としては空前的規模となる緊急発掘調査にどう対応するか、関西の考古学界は騒然となった。それまでのように、大学の研究室や有志による体制では対応できないことが明らかで、金関先生や佐原真氏が加わった委員会で検討を行った結果、新たな調査体制を構築することが決定した。「第二阪和国道内遺跡調査会」という組織が新たに発足し、金関・佐原両委員の指導のもと、若手の調査員が専従で現場作業にあたることになったのだ。膨大な面積を短期間に発掘する必要に迫られた調査会は、作業の迅速・合理化を図るため、金関先生の提案に従って「イスラエル方式」を採用し、発掘作業と遺物整理作業を分離して同時に行う態勢を取った。こうして、昭和44年(1969年)2月から昭和46年(1971年)9月まで、道路路線部の約1.8万㎡(幅30m、総延長約600m)について発掘調査が実施された。



写真1 調査風景の再現模型
(大阪府立弥生文化博物館)

発掘調査では、弥生時代各時期の遺構と夥しい遺物が出土し、弥生文化の解明に画期的な成果をもたらすことになった。集落を囲む環濠が多数存在することが確認され、

査など、大阪府内における遺跡調査を継続的に担当することになった。大阪府では、このように、全国に先んじて、行政発掘の体制が本格的に整えられたのだ。

新設された国道に隣接する遺跡の中心部は、昭和51年(1976年)、約11万㎡の範囲が国の史跡に指定され、保存されることが決定した。現在の経済活動において重要な大都市周辺の平地部で、前例のない広範な面積が史跡に指定されたのは、市民レベルの幅広い保存要望が実を結んだ結果と言える。史跡指定20周年を翌年に控えた平成7年(1995年)、文化庁の「古代ロマン再生事業」の第1号として、保存された池上曾根遺跡の中心部について、史跡公園の整備を行うための発掘調査が行われた。その結果、集落中心部に、弥生時代中期後半の大型

掘立柱建物とクスノキの丸太をくり抜いた大きな井戸枠が存在することがわかり、近畿地方で弥生時代の大規模集落の構造が



はじめて具体的に写真2 整備された池上曾根遺跡史跡公園
解明された。この成果を受けて、「弥生都市論」が提起されるなど、池上曾根遺跡が新たに注目されることになった。さらに、翌年(1996年)には、年輪年代法によって、ヒノキを用いた大型建物の柱材のひとつが、紀元前52年に伐採されたことが明らかになった。その結果、近畿地方における弥生時代中期後半の年代をそれまでの想定より約100年古く考えざるを得なくなり、まさに歴史を塗り替えることとなった。

このように振り返ると、池上曾根遺跡は、昭和から平成の各時代において、2度にわたって、エポックメイキングとなる発掘調査が行われ、弥生時代研究のみならず、同時代の社会に対しても影響を与えてきたことがわかる。昭和40年代の国道建設に伴う緊急調査は、金関先生の貢献もあって、その後の日本における緊急発掘調査の体制を整備する契機となり、関係者の努力で集落中心部が史跡として保存された。平成の時代には、史跡公園整備に伴う集落中心部の発掘調査で、大型建物とくり抜き井戸が発見され、年輪年代法によって弥生時代の実年代が更新される大きな成果が導かれた。平成3年(1991年)には、遺跡の南に隣接して、弥生時代をテーマにした全国唯一の博物館として、大阪府立弥生文化博物館が開館し、金関先生が初代館長を平成26年(2014年)まで務められた。平成11年(1999年)、現地に復元された大型掘立柱建物は、「いずみの高殿」と命名され、幹線道路沿いの史跡公園内に静かにたたずんで、地域のシンボルとなっている。

[参考文献]

秋山浩三『弥生実年代と都市論のゆくえ・池上曾根遺跡』、新泉社、2006年。